

瓜哇紀行

(中)

文學博士 松本文三郎

三 バタビア

バタビアは和蘭人によつて建てられた、云はゞ新開地であり、其創立以來僅かに三百年の星霜を経たに過ぎない歴史的背景の極めて乏しい所である。元來一五八〇フキリツプ二世がスペインとポルトガルとの兩國を統一してから、和蘭船のリスボン入港を禁止した。當時東洋貿易の全權はポルトガル人の掌中にあり、和蘭人は唯此に集注した香料を始め其他の物品を歐洲諸港に分配するに過ぎなかつた。所が今や彼等はリスボンに入ることを出来なくなつたが爲め、其海上貿易の野心を全

然放棄するか、若くは自から東洋の航路を開くか何れか一を擇ばざるを得ざる究境に立つた。然るに當時東印度諸島への航路としては、ポルトガル人は喜望峰を迂回し、スペイン人はマラゼン海峽を通過したのであるが、何れも絶對秘密に附せられ、海圖は出帆の時船長に與えられ、歸航の時は直ちに之を返却せしめ、航海中も船長以外斷じて他の船員の視るを許さなかつたものである。(Cabaton-Java, Sumatra, Sec. p. 29)で和蘭人は一時南極を通じ印度に出づる途をも索めたが、成功せず、百方苦悶の後、竟に Cornelius Houmanなるもの偶リスボンに在り、漸くにして其秘密

を探り得たので、一時は彼も之が爲め獄に投せられたが、代償金によつて其罪を免れ、和蘭に歸り此に東邦商會 (Compagnie van verre) なるものを組織し、一五九五年 Houtman 兄弟 (C. and F. Houtman) は Jan Molenaer 等二百五十人と共に

四隻の船に分乗して、翌年开始めてスマトラに達し次いで瓜哇の西岸スンダ海峽に面する Bantan に至つた。是れが抑も和蘭人の瓜哇に來た始である是れより先きポルトガル人はバンタンを陥ぬれんとして、其土王と戦争を始めて居たが、容易に之を抜くことを得なかつたので、彼等は和蘭人の渡來を以て反つて幸となし、和蘭人亦バンタン陥落の後には此に商社を設くべき約束を以て彼に應援し遂に其目的を達した。爾來和蘭人はスペインの尾大掉はざるに乘じ、次第に舊ポルトガル殖民地に其勢力を扶植し之を驅追し、一六六〇年葡西兩國間の不和以來東洋の商權は殆んど和蘭人の獨占す

る所となつた。其後歐洲に於ける國際關係の消長によつて、東印度諸島の商權も亦屢移動し、瓜哇の如きも或時には佛國旗の翻る所となり、或時には英國の領土ともなつたが、一八一四、五年以來は、確實に和蘭人の領土となつたのである。

斯の如く和蘭人は一五九六年始めてバンタンに來たのであるが、次第に東洋の交通が頻繁となり一六〇二年には和蘭東印度商會なるものが組織せられ、一六一〇年には始めて總督が置かれた。が尙ほバンタンを以て瓜哇の根據地として居たのである。一六一八年に至りバンタンの根據地を棄て東の方當時 Djakatra (Batavia) と稱した土人町の傍に和蘭政廳並びに商館を移し來つた。是れが今のバタビアの舊市街(下町)であるが其新植民地をバタビアと稱したのは實に一六二一年からである而してバンタンは元とバンタン國の首府であつたが、其國も滅び、一時は各國商船の幅狭したベン

タンの港も、今や荒寥たる漁村となり了つた。

バタビアの舊市街は元來河水の沙泥を流出した洲の上に建てられた所であるから濕地であるが、一六九九年彼サラク火山の大噴火以後特に太甚しく、一七三三から同三八年の間には毎年熱病の爲めに死せるもの二千人に達したといふ。或は「世界に於ける最も不健康地」とも稱せられた。一八〇八—一一年の間總督であつた Doandels は市街の北方稍高燥の地に新市街(今の上町 *Veltevreden*)を造り、家屋も和蘭風に密閉したものでなく、熱帶地方に適應し、空氣の流通を善くしたが爲め幾分其弊を免るを得た。が今日でも瓜哇島に渡來する外人は、必らず一度はマラリアに罹からざるはないともいはれて居る。斯く新市街が出来てからは、是れが外人の住宅地となり、舊市街は單に商業の爲めの事業處銀行等の集まる所となり、外人にして一人も此に宿泊するものはなく、住する所

のものは唯支那人若くは亞刺比亞人か土人のみである。

斯く新市街即ち上町は最近に成れるものであるから、全く近代風の建築のみで、更らに見るべきものはない。唯バタビア人の所謂「世界最大の練兵場」と稱する *Koningsplein* の西方直ちに之に面し、バタビアの考古博物館なるものがあるのみである。此博物館には瓜哇各地より發掘した古代の佛教や婆羅門教の彫像を始め、刀劔石碑から衣服織物の類や家屋の標本に至る迄之を陳列し、又中には和蘭東印度商會時代に使用した器具裝飾品等を蒐集した室もあり、可なりに興味多いものである。

下町の今多く歐人の商店事務所のある所は、古の貴族町であつて、元の水晶宮といはれた商館の跡は殆んど全く消滅し、商店の前面にそれと覺はるゝ古代和蘭風の彫像の痕を認め得るのみであ

る。昔のジャガタラの市も、一面に荒野となり、今は僅かに一市街に其名を留めて居るに過ぎない。十七世紀に創建せられたポルトガルの寺院も存在するが、是れ亦歐洲に於ける貧弱なる田舎寺を見ると同じで、餘り興味のないものである。唯此には奇怪なる遺物が一二ある。其一は今ペナン門と稱する門外、草莽の間に長さ十五呎計りの大砲が一門横はつてある。如何なる故に此にあるのか知らぬが、之と同様のものが尙ほ一門、ベンタンの北岸にあり、此二門が相會する時が即ち和蘭人の瓜哇より追放せらるゝ時である。土人は信じて居る果して何時斯かる時期が到來するのであらうか。而して一方では又此大砲を以てリング(陽神)となし、土民は之に燈明や香華を捧げ禮拜して居る。元來今の瓜哇人は殆んど全く回教徒であるが、彼等は嘗て佛教の盛なる時には佛教徒となり、婆羅門教の行はれた時には婆羅門教徒となり、回教の

渡來と共に又回教信者となつた。而して舊信仰は殆んど忘れたるが如く棄て、顧みない。彼等は斯く如何なる宗教も容易に之を信じ得らるゝと同時に、回教徒であるといつても、他國の回教徒とは大に其趣を異にし、婆羅門の神像に對しても又佛教の寺塔に向つても、禮拜供養して秋毫も怪しまぬ。前のリング信仰の如きも亦其一例である。基督教は何故か此には餘り多く布教せられないが、若し基督教なり佛教なりが、稍熱心に之を布教すれば、彼等の信仰は又直ちに變化するであらうと思ふ。

今一つ奇怪なるは Erberfeld の髑髏と稱するものである。前記教會堂を去る遠からず、ジャガタラの町の左側に、古代家屋の周壁の殘缺があり、其上に一の髑髏が載つて居る。一見する所では石彫のやうにも見へるが、生首の上に石灰を塗つたものだといふ。Erberfeld とは名を Prier といひ、元と

獨逸人と土人の女との間に生じたもので、後回教徒となり、竊かに土民の間に勢力を扶植し、其徒一萬七千人と稱せられた。彼は和蘭人を驅追し、自からバタビア王たらんことを企てたのであるが和蘭政廳に内通するものあつて、其事敗れ、一七二二年其徒皆殘殺せられ、其家は毀たれ、彼の首は永久に其周壁の一部に曝され、後世の誠とせられたのだといふ。現に其首の下には蘭語と土語とを以て其因縁を彫刻した石を壁に簞込んである。蘭語の分は次の如くである。

Oyten verfoeyelyke

Gedachtenisse tegenden

Gestrafen land veran =

der Pieter Erberfeld

sal ni-mant vermoogen

te deeser plaats te

bouwen timmeren met =

sclen off planten nu
offe ten ewigen dage

Batavia den 14 April A° 1722

(右英譯—To perpetuate the accursed memory
of the condemned traitor Pieter Erberfeld, shall
no one raise on this spot house, building, or
structure nor plant now and forever more. Batavia
the 14. april anno 1722)

此殘忍不道なる記念も必らずしも後世の誠とはならず、和蘭人に對する土人の反感は今に至つて尙ほ全く消滅したとはいへぬ。一八二五年にはジャクシア王の子 Dipo Negors (又 Anta Wiria) なるもの徒黨を結び、和蘭人に對し反逆を企て、五ヶ年の星霜を経て漸くに之を鎮定したこともある其後は絶えて斯かる例はないが、和蘭人の土民の叛亂を恐るゝこと一様でない。一體瓜哇の軍隊は四萬人であるが、其三分の一が、歐人であり、和

蘭人が其將校となつて之を統率して居る。が兵の多分は土民を徵集したものであり、而して彼等は總べて回教徒である所から、如何なる地方に於ても土民兵をして其過半数をなさしめず、其駐在の場所をも變更し、警誠怠らざるのである。

尙ほバタバア所見の中、最後に一言して置きたいのは日本人ミカエリス長兵衛(?)なるものゝ墓碑である。此墓碑は元民家の礎石として用ゐられてあつたのを、耶蘇宣教師が発見し、之を日本領事に報告したので、國外には搬出せざる約束を以て領事館に譲受けたものださうで、今はバタバア日本領事館の前庭に立てゝある。碑の裏面には中央に留魂碑と書し、左右には多數の支那人の名を幾行にも刻してある。其文字は磨滅して善く明かならぬが明代支那瓜哇間の貿易船の沈没した時其乗込員の記念碑として作つたものらしい。此舊碑を利用し、後に長兵衛なるものゝ、碑を其裏に刻

したのである。長兵衛とは如何なるものか判らぬが、當時のジャガタラに渡りたるものゝ中、夙に基督教に化し彼に死したるものも少からぬことであらうから、尙ほ仔細に探索したならば、他にも比類のものゝ発見されぬとも限らぬ。現バタバア駐在の松本領事が苦心して撮影せられた此石碑表裏両面の寫眞は、同領事の好意により携歸つたが、我が同僚にして此方面の研究に熱心なる新村博士に交附して置いたから、後日何等かの機會に同博士の手によりて發表になるかも知れぬ。

四 ジオクジャ

二月三日午前七時バタバア發の汽車に乗じ、同日午後五時十分ジオクジャに着、前日バタバアの松本領事より當地の富士洋行店主宛紹介せられ居たので、同店の澤部氏停車場迄出迎えられ、直ちにグラント・ホテルに入つた。瓜哇は全積僅かに五

萬方哩に過ぎない猫額大の土地であるから、印度旅行(印度の全積は約二百萬哩)の心持を以てすれば、何處へも瞬時にして至り得らるゝやうにも考へらるゝが、此地では石炭は産出せず、樹木が密生するので、宛も錫蘭島に於ける如く汽車にも多く木材を燃料とする上に、夜分は一切汽車の運轉を休止するので、夜汽車を利用する譯に行かず、時間の不經濟を生ずること夥しい。余輩には勿論専門外のことであり、又餘り多くの興味もないが瓜哇に於ては彼 *Buitenzorg* 植物園なるものは最も有名で、東洋第一とも稱せらるゝのであるから時間の都合さへ出来れば、一通りだけでも通覽したいといふ希望をも有つて居たのであるが、往復共此に下車すれば、勢其夜は此に一泊しなければならぬので、遂に之を見る機會を失つた。此點では世界中印度程便利で又氣樂に旅行の出来る所のないことを情々感じた。

印度は英領といひながら、其中半獨立國即ち保護國と稱する土地は豫想外に多い。面積からいへば半獨立國の全部を合すると、全印度の三分の一以上に及んで居る。勿論此等の中には、僅かに一二ヶ村から成立つやうな小さなものもあるが、又其大なるもの、例之へばハイデラバトやカシミール國の如きに至つては、各伊太利本土位の大さを有つて居る。其成立の因縁に就いては、各特殊の歴史を伴ふのであるが、概して之をいへば、英人によつて征服せられた所は英領となり、歸順した地方は半獨立國として存せられたのである。固より始は保護國であつたものも或は諸種の失政により或は王系の相續者のなかつた場合、英領に編入せられたものもあるし、又英領となるべきものも、政略上から其前王の子孫を擁立して保護國としたといふやうな例外もある。而して此等保護國の主權者は *Raja* (王) 又は *Maharaja* (大王) と稱し、

外交軍事等重大な事件は一切英政府の手に收め、又常に英國代官を置いて其政治を監督せしめては、あるが、普通國內の小事には餘り干渉を受けない。で其國々には年々國會を招集して國事を議せしむるものもある。之と同じく猫額大の蘭領瓜哇にも半獨立の小保護國が二ツある。今此にいふ所のジョクシアと其隣國ソロとが即ちそれである。之を *Vorstendlanden* 即ち王國といひ、瓜哇全積の十五分の一に當る。がソロの王は之を *Susuhvan* といひ、ジョクシアの王は之を *Sutan* と稱する。併しながら此等諸王は、其出づるや車駕若くは象馬に乗り、日傘を以て之を蔽ひ、少數の護衛兵に守られ、人民よりは土下座を以て迎えらるゝといふ虚榮心を満足せしむるのみであつて、其實力に至つては印度ラージャよりも尙ほ一層憐むべき土偶たるに過ぎない。其外交軍事貨幣鑄造等の大事は勿論のこと、其王位後繼者を撰定するにも、大臣百官を

任命するにも、將た大小百般の政務は一として彼代官の許可を得ざるはない。のみならず、彼等は一切外間との交通を杜絶せられ、外間より訪問若くは書面を受くるにも、代官の許を要し、彼の許可なくしては如何なる距離の所へも外出するを得ず、甚しきは散歩にも出づることが出来ないのである。名は王といつても、實は體の善い監禁者である。約七拾萬圓の年金を以て、其自由と國家の財産とを賣り、碌々其生を送り居るのである。而して彼等は市の一端に稍廣宏なる宮殿を構えて居るが、其前面には之と劣らざる、否寧ろ尙ほ一層巨麗なる代官の官舎が聳え、絶えず其監視の眼光を輝かし、若し一定の儀式等に於て一般人民に接見する節には、代官は國王と全然同一の盛装をなし、同一の玉座に坐するのみならず、代官と國王と相並び立つ時には、代官は必らず其右方の地位を占むる。右方は瓜哇に於ても支那に於けると同じ

く上位であるからである。

併し如何に有名無實とはいへ、四方蘭領に取捲かれたオアシスのやうに、今日に至る迄王國の名を存するを得たのは何故かといふに、是れには可なり複雑な歴史がある。今余輩は此に之を繰返す要を認めぬが、唯單簡に一言して置かうと思ふ。抑も印度人が瓜哇に移住し來つてから幾年かの間に全島を統一し、今スラバヤの附近なるマジヤパヒト(Majapahit)を以て其都とした。勿論當時は封建制度の如き形を採り、各地方には各小王あつて之を支配して居た。其後十三四世紀の頃アラビア人は次第に通商の爲め瓜哇の沿岸地方に來り、商業の傍回教を内地に流布せしめんと努めた。劍とコーランを左右の手にせるアラビア人は、世界の何處に於ても見る如く、此處にも一面には回教を鼓吹し、他面には其領土を開拓した。西方スندگان地方の都今のバタビア附近の Pajajaran 先づ彼

等の手によつて陥落せられ、次に東方印度人の都 Majapahit 亦之と其運命を同じくするに至つた。是れは何れも十五世紀の初頃のことである。中部瓜哇に於ても沿岸に移住したアラビア人は、次第に内地に侵入し、始め Demak に本據を置いたが漸に今のソロやジャクシア地方に迄擴がり、此にマタラン帝國なるものを作つた。併し此地方一帯に住する印度の小土王は、極力外人を排斥したので、アラビア人の子孫が其主權を執つてからも、彼等は必らずしも其勢力を失はず、千七百年代の中葉に至る迄は、此等土王とアラビア人と歐人との間、斷えざる騷亂を繼續して居たのである。如何なる故にか中部瓜哇人は最も保守的氣質を有し最後迄外人の爲め征服せられなかつた。是れが今日でも此地方に於てのみ外人の勢力に感化せられざる古代瓜哇風俗の見るを得る所以である。併し瓜哇の東西各地何れも其主權の、アラビア人よ

り更らに歐人の手に移つたのを見ては、到底此豆大の地方の久しきに持すべからざるを感じたものと見え、一七四九年マタラン王 Pateo Bewono II の没するや、其遺言によつて同帝國を和蘭東印度商會の手に讓渡し、ソロとジョクジャとを其王家の爲めに保留したのである。で和蘭政府に於ても其 Susuhunan の名を存し、半獨立國とし、一定の年金を與へ之を優遇した。是れが保護國となつた抑もの源因である。當時は今のソロもジョクジャも共に一國として同一 Susuhunan によつて支配せられて居た。所が其後、王の兄弟の間王位の争奪が起つた。兄の王子は勿論正當なる王位の相續者であるが、弟の王子は印度土王の歡心を得、其勢力を恃んで王位を奪はんとしたのである。和蘭人は之を見、好機逸すべからずとなし、苦肉の策を其間に運らした。元來蘭人は Susuhunan の獨立を承認したといふものゝ、回教の性質とし

て一朝其勢を恢復した時には、如何なる異變を惹起するに至るかも知れぬので、内心竊かに疑懼を抱いて居たのである。ではより先、支那移住民の土王に對し叛逆を企てた時にも、土王の需めにより蘭人は直ちに其兵を送り、之を壓抑し、其恩を賣つたこともある。今や其内訌に接しては其土地を分割し其勢力を削ぐに如くなしと考へ、傍觀者の如き態度を以て之を仲裁し、全土の三分の二は之を兄に與へ、其三分の一は弟の領土とし、彼を以て Susuhunan に對し Sultan の尊稱を冒すことゝなした。宛も是れは家康が本願寺の勢力を忌み、之を二分し東西兩本願寺を對立せしめたと同筆法である。斯くして出來たのが今のソロとジョクジャとである。併しジョクジャの王は sultan とは稱しても、其實尙ほ Susuhunan に對しては臣下であつて、毎年一回謁見式がジョクジャ附近の Ngawen なる地方に行はれ、此に於ては Sultan は

其靴を脱ぎ、跪坐して *Susunman* に忠誠を誓はなければならぬのであつた。所が *Sutan* としては是れ亦甚だ遺憾に堪えない所である。で何とかして此式を廢し、ソロの王家と對等の地位に進みたいと熱望して居た。而して是れ亦蘭人の好む所であつた。で蘭人は之を見、更らに一の苦肉策を案出し、私かに之を *Sultan* に授けた。或年例の如く謁見式が舉行せられた。*Sultan* は意外にも蘭人の軍服を装ひ、*Susunman* の前に顯はれ、座に着いた儘跪坐の禮をなさなかつた。蘭領瓜哇では如何なるものでも苟くも蘭國の軍服を着したものに對しては、跪坐の禮を嚴禁してあるのである。*Susunman* は之を見非常に激怒し、其後久しく互に軋轢して居たが、又々蘭人の仲介によつて彼等は各獨立し、均しく蘭國王の臣下たることゝなり蘭人苦肉策は此に能く其功を收め、以て今日の狀態に至つたのである。

ジョクジャアの地は今蘭人によつて *Djokjakarta* 書かれて居るが、*Raffles* 氏は之を *Yugya-karta* (即ちユギヤ城) といふ。而して此名稱は *Ayudha* (又は *Ayodhya*) から轉化したものともいはる。傳説では其最初の王を *Naryudya* と稱し、彼并びに其後繼者は其附近に於て宮殿殿堂寺塔を建立したといふ。が此 *Naryudya* といふも亦恐らく *Ayodhya* から附會したものではなからうかと思ふ。阿輸陀とは中印度と西印度との境、今 *Oude* の地で、デリーから餘り遠からざる所であるが、佛敎史上では彼瑜伽派(法相唯識宗)の始祖たる無着の此に住し説法し、一宗を開いた所であり、又其後は世親も此に來つて其説を繼承し、大乘佛敎を印度に流布せしめた處である。而して阿輸陀の名は瓜哇のみならずシヤムの舊都、今のバンコックから汽車二時間程の處にも *Ayuthia* と稱する所があり、是れ亦印度の同一地名を移したものだらうと

思ふ。勿論是れは印度阿輸陀人が此等地方に移住し來つて植民地を造つた譯ではなく、又此等地方の人民が彼佛教祖師を愛慕する餘り、其地名を此に移したのでもない。印度阿輸陀地方は今や全く荒廢し、唯僅かに密林の裡古代遺跡の埋没せらるゝを見るのみであるが、昔時殊に彼印度舒事詩ラーマヤナ時代には印度に於ける最大最美にして又四方より貨物の輻湊し來つた大都會であつた。所がラーマ物語なるものは古來印度人の最も愛讀する文學であり、従つて印度人の移住し若くは印度文化の及ぶ所には、此等の文學亦少からざる影響を與えて居る。現に瓜哇に於ても民間最も普通に行はるゝ影演劇の *Wayang* と稱するものゝ脚本も、亦主としてラーマ物語やブハーラタ物語に依つて居る。而して是れは無言にして所作のみを寫出すのであるが、之を観るもの其大體を理解し得らるゝ程度に迄教育せられて居るのを見て、

其説話の一般社會に普及し、其由つて來る所の遠いことが判る。のみならず彼等は此物語を自國に移し、印度に於ける事實ではなくして、瓜哇に於ての出來事と符會するに至つた。而して印度人が瓜哇に移住し來つてからは、今のジャクシア附近に一大都會を建立し、其文化の中心をなして居たことは、現存するポロポトルを始め、佛教、婆羅門に關する最も優秀にして、瓜哇の他の地方には到底之と比肩すべからざるものゝ多く存在するに見ても、容易に推測し得らるゝことである。で彼等は其都會をラーマ物語に據つて阿輸陀と命名したのであらう。

余輩はソロに行くべき何等の興味を有たず、又時間もなかつたので、彼に就いては全く知らぬが瓜哇に於ける佛教遺跡を探ぐるにはジャクシアを中心とし、彼此に巡回するのが最も便利である所から此に來つた。ジャクシアの市はメラビ噴火山

の南麓に位し、可なり高燥で、瓜哇全島中最も健康地と稱せらる。市内も一通見たが、特に注意に價するものはない。此に王宮の西餘り遠からざる處に「花園」又は俗に「水城」と稱する建築が殆んど唯一の見物場

所となつて居

る。是れは十

八世紀の中葉

ポルトガルの

技師の設計に

より、當時の

王 Manku Bo-

eni の造る所

といふ。宮殿の周圍に水を引き、宛も浮島の如くし、其中にあつて暑を避け、燕樂に耽つたものといふ。中には饗宴所あり食堂あり寢室あり庭園あり泉水あり、規模必ずしも大なりとはいへぬが、

頗る贅澤なるものゝやうである。建築材料は主として煉瓦を用ひ、上に泥を塗り、スタッコを以て壁面諸種の裝飾をなしたものらしい。建築は一八六七年の地震によつて殆んど全部破壊せられ、今は



瓜哇將鉢鉢伐帝像

僅かに其一部を存するのみであるが處々斷片には尙ほ昔時の面目を髣髴せしむるに足るものがある。

尙ほ余輩の止宿して居たホテルも一隅には、賣店が

設けられてあつて、此には瓜哇人の手によつて成れる諸種の土産品が陳列せられてあつた。余輩も一日食後之を一目したのであるが、其中偶々一個の古代彫像を發見した。是れはジョクシア附近の

舊蹟から發掘したものと云ふ。石材は瓜哇特殊のラワ石で、長約二尺四寸、幅一尺三寸位、彫刻は必らずしも美なるものではないが、瓜哇古代彫像の一參考品とするに足るものである。瓜哇の彫像の我邦に傳はるものは恐らく絶無であらうと思ふし、特に近來は蘭國政府に於ても、英領印度に於けるが如く、内地の古美術品を國外に輸出するを嚴禁して居るから、今後其優秀の參考品を獲る事は困難であらうとも考へ漸く之を將來することに

經濟地理上より見たる戦後の世界（下）

した。此彫像は Parvati であつて、恐らく婆羅門教徒の作る所であらうが、先づ九世紀前後の作らしい。ラワ石は質頗る粗であるが、上には白堊を塗り彩色を施したものであるから、其石質の如何は製作當時には餘り外觀上關係しなかつたものと思ふ。今存する遺物には其上部の着色悉く剝落し殆んど見るべからざるのであるが、此像には尙ほ處々白堊を存し、着色も極めて薄くなつて居るが稍之を認め得らるゝのである。

文學士 寺田 貞次

先づ歴史的に觀ますと、夫の古代の文明が地中海東部に發し、希臘に傳はり、羅馬に盛へ、西班牙に移り、又印度の文明が支那に盛へ、朝鮮を經

て日本に傳たのは、主として交通上の關係であつた。希臘にせよ、伊太利にせよ、朝鮮にせよ、皆半島國である。之は人文地理學上、半島は文明の媒